

学 位 論 文 要 旨

氏 名 則包 和也

題 目 統合失調症患者の幻聴症状を把握する面接の実践と効果検証
—認知行動療法の導入と自己対処を援助する看護を目指して—

【目的】幻聴は統合失調症で最も頻発する症状の1つであるが、統合失調症患者（以下、患者）に深刻な影響を及ぼすにもかかわらず、これに対する効果的な看護は未だ確立されていない現状がある。そこで、①患者が独自に行っている幻聴への対処を把握すること、②幻聴が患者の認知や感情等へ及ぼす影響について、認知行動療法の理論を基盤とした面接マニュアル「ホットチャート」を用いて共有すること、③幻聴の共有が看護師に及ぼす影響を統計的に比較し検討すること、を目的として研究を行った。これらの研究結果を基として、幻聴への対応に認知行動療法の視点を取り入れた看護について考察することを、本博士論文の主たる目的とした。

【方法】本論文では、『統合失調症患者が行っている幻聴への対処アプローチ』、『幻聴が及ぼす影響を多角的に評価する面接マニュアル「ホットチャート」の実践-認知療法の視点を取り入れた幻聴のアセスメント-』、『幻聴がある統合失調症患者への面接マニュアル「ホットチャート」を用いた面接の効果の検証-精神科看護師の認知・感情・対処の評価から-』の3つの研究を基盤とし、第II章～IV章で各研究の結果と考察を示しながら、第V章において幻聴に対する効果的な看護について総合的に考察した。

【結果】第II章では、幻聴がある30名の患者に対して、半構造化面接を実施し、幻聴への対処についての回答を求めた。得られたデータをラザルスのコーピング理論に基づいて分類したところ、患者は幻聴に対し、【幻聴と関わらない】と【幻聴と関わる】、および【活動を活発化する】と【活動を抑制する】という互いに相反する4つの“情動中心の対処”を行っていることが明らかになった。また、【他者と交流を持つ】【有効な対処の活用】【正確な情報を得る】の3つの“問題中心の対処”を行い、冷静かつ論理的な対処をしていることも明らかになった。

第III章では、急性期病棟に入院した4名の患者を対象として「ホットチャート」を用いた面接を行い、幻聴が起りやすい状況・内容・認知・感情・身体・行動・対処について得られたデータを分析した。それによって患者が、幻聴に対して絶対に逆らえないなどの被支配的な認知、幻聴が現実には聴こえているという認知を持っていること、さらには、聴こえる声が幻聴かもしれないと判断する客観的で合理的な認知も持っていることが明らかになった。また、幻聴が発生する状況や、患者の感情、身体、行動に及ぼす幻聴の影響について、一連の過程として明らかになった。

第IV章では、「ホットチャート」を用いた面接の実施を、患者-看護師のペア23組に依頼し、面接の前後で、幻聴の訴えに対する看護師の認知・感情・対処を評価する尺度のデータを、コントロール群と比較した。その結果、面接によって、看護師が幻聴について患者と話し合う機会が増えたと認知し、幻聴の訴えに関わりたくないという認知が改善していることが、統計的な比較によって明らかになった。その一方で、患者からの幻聴の訴えに対して、怒りという感情が強まったことも明らかになった。

【考察】患者が行っている幻聴への対処について、効果的と思われる方法が含まれていたが、非効果的で患者に大きな負担となっている対処もあり、看護師がこれらの情報を把握することの重要性が示唆された。また、「ホットチャート」を用いて幻聴症状がある患者に面接を行った結果、患者は幻聴に対して、制御できないという被支配的な認知や、現実の音と受け止める認知を持っていることが明らかになり、これらは患者の否定的な感情や問題行動につながっていた。その一方で、幻聴と現実の音を区別したり、客観的に考えたりする合理的な認知も持っていることが明らかになった。これらのことから、「ホットチャート」を用いた関わりは、幻聴の共有を促し、幻聴を訴える患者に対する看護師の理解が深まる可能性が示唆された。

また、精神科看護師を対象として、「ホットチャート」を用いて患者に面接をする群としない群に分け、面接の前後の質問紙への回答データを統計的に比較した。その結果、「ホットチャート」を用いた面接によって、患者と幻聴を話題する機会が増えたとしながらも、幻聴の訴えへの負担感が有意に軽減していた。このことから、「ホットチャート」を用いたアプローチは、幻聴を訴える患者に対する有効な看護につながる可能性が示唆された。

これらのことから、幻聴を訴える患者への看護として、まず、患者と真摯に向き合い、患者が既に行っている対処を把握する過程において、信頼関係の構築に留意しながら関わる必要があると思われた。また、幻聴に対する患者の認知に着目する「ホットチャート」によって、幻聴が及ぼす影響を詳細に把握しながら患者と関わることは、認知行動療法の視点を取り入れた看護として着目される視点であると推察された。